

H22.3.23. 中日新聞

イラスト・平松ひろし



## 子をしかる

言い換えると、相手の事情を「びど」と思わず、しかし、過度に反応せず、一呼吸おきながら控えめに共感する。そこに、言葉のキヤツチボーレのコツがあります。

「子どもしかるな来た道じや、年寄り笑うな往く道じや」との言い習わしがあります。しかることを否定するのではなく、しかる際に自分の子ども時代を思い、若干のためらいを感じるべし。そうすれば、

コミュニケーションは双方で相補的なのが基本です。人と仲良く生きるには、一方的に話し過ぎず、聞き過ぎないのが肝要です。職場でコミュニケーション力の高さを自負していた父親が、「理屈と効率で押しても、家族の問題には通用しませんでした」としおげていたのを思い出します。

# 還る家は おーますか

富士也

⑩

しかり方に優しさがこもるという意味です。他人の老いを笑う際も、いずれ自分も老いることを思えば、笑いにいたわりが宿る、と。

ひとりでない親しい間柄だからこそ喜怒哀楽は入り乱れる。しかし、慌てて反応せず気持ちに一拍おくことで初め、じっくり苦楽をかみしめ合えるという教えです。

ある日の相談室。髪を金色に染め、やんちゃ放題の娘を前に、体裁を気にしていられなくなつた母親が、思わずこぼしました。「どこで覚えたか、そのひどい格好と汚い言葉はなに? 努力すれば伸びる子だったのに」

対する高校1年の娘の言ひ分はこうです。「自分だって身に覚えがあるでしょ。写真で見たけど、結構派手な高校生だったよね。自分が報われなかつたからって、娘に妙な期待をしないで!」

その後の母親が見事でした。娘の前で「いい親」であろうと強がっていた自分を認め、言葉に詰まりつつ、とつと語つたのです。聞き終えた娘はほほ笑んで、「髪をふり乱している今のお母さんが一番きれい。気持ち、分かるよ」。素直なたわりの言葉でした。

現世で存分に泣き笑つた人に、来世の安穩が約束されといいます。仏教の教え「俱会一処」が胸に響きました。(子ども家庭教育フォーラム代表)

||おわり